

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

教科書じや学べなかつた福祉

大井町立湘光中学校

三年 藤澤 優 羽

今年の夏、父が働いている老人ホームに、ボランティアとして行くことになった。きっかけは、父から一度来てみないかと声をかけられたことだった。最初は少し戸惑った。父の職場に行くのは恥ずかしかったし、高齢者とどう接すればいいのか分からなかつた。けれど、少しでも人の役に立てるならと思い、思い切つて参加することにした。施設に入ると、冷房の効いたロビーに、どこか懐かしいような香りが漂つていた。スタッフの方に案内され、いくつかのグループに分かれて、お年寄りと過ごす時間が始まつた。私が担当することになつたのは、ほとんど言葉を話さないという、車いすの男性だつた。

「この方は耳が少し遠くて、最近は言葉も少なくなつていて。でも、手を握つてあげると落

ち着かれるんです」

スタッフの方がそう言つて微笑んだ。私は正直、戸惑つた。ただ手を握るだけでいいのだろうか。それで意味があるのだろうか。でも、目の前のその人にとって、それが必要な時間なのだと想い、そつと手を差し出した。彼の手は少し冷たく、細くて、でも少し力がこもっていた。ゆっくりと手を握り返してくれたとき、不思議と胸がじんとあたたかくなつた。何も言葉は交わしていないのに、ありがとうと言われたような気がした。そして私の中に、それまで感じたことのない感情が湧いてきた。誰かの存在をそばで支えるということは、特別な技術や言葉がなくてもできるんだ、と気づいた瞬間だつた。その後、何度か施設を訪れた。行くたびに、その男性は私の顔を見ると少しだけ笑つてくれるようになつた。話せないけれど、目や表情で気持ちが伝わるということを初めて実感した。ある日、施設に行くと、その男性の姿がなかつた。職員の方から

「先週、静かに旅立たれました」

と聞かされたとき、私は涙が出そうになつた。長い会話をしたわけでも、特別な思い出があるわけでもない。でも、心が通じたと感じたあの時間は、私にとってとても大切なものであり、彼にとつても、少しでも穏やかな時間になつていたと信じたい。この経験を通して、私は福祉の本当の意味を知つた気がする。福祉とは、特別な人がする特別なことではない。誰かの気持ちに寄り添い、その人の人生にそつと関わること。それは、私たち一人ひとりにできることだ。福祉とは人を助けることではなく、一緒に生きることなのだと思う。これか

らの社会は、どんどん高齢化が進んでいく。介護や医療、地域の支え合いがますます大切になる中で、福祉は誰にとつても無関係なものではない。私自身も将来、誰かに支えられ、また誰かを支える立場になるかもしれない。だから私は思う。人と人が向き合い、心を通わせること。それが福祉の原点なのではないか。たとえ言葉がなくとも、ただそばにいること、手を握ること、目を見て微笑むこと。その一つ一つが、誰かの心を支える福祉なのだと、私は信じている。

